

2017 年度 小委員会活動成果報告

(2018 年 2 月 15 日作成)

小委員会名	比較居住文化小委員会	主 査 名：前田昌弘 就任年月：2016 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	建築計画委員会 (住宅計画運営委員会)	委員長名：大原 一興 主 査 名：黒野 弘靖
設 置 期 間	2016 年 4 月 ～ 2020 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>人・物・情報が世界規模で行きかう現在、それらの要因に影響を受け、居住の質も劇的に変化している。こういった状況下、フィールドワークによる居住文化の研究および、それをもとした多様な展開を推進し、建築学の発展に寄与する。各年度とも以下の活動を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域に根ざした計画手法の集積および、その研究 2. フィールドワークによる居住文化研究に関する情報の発信 3. フィールドワーク事例の見学会の開催 4. フィールドワークを主体とした研究を行ってきた研究者による、研究の視座および方法論を紹介する書籍の刊行準備 5. 上記目的にそった拡大小委員会および公開研究会の開催 	
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：有	
	主査：前田昌弘 (京都大学)、幹事：栗原伸治 (日本大学)、本間健太郎 (東京大学生産技術研究所)、委員：アルマザン・ホルヘ (慶應義塾大学)、稲垣淳哉 (エウレカ/早稲田大学芸術学校)、上北恭史 (筑波大学)、内海佐和子 (室蘭工業大学)、北原玲子 (名古屋女子大学)、小林広英 (京都大学)、サキヤ・ラタ (ハウジングアンドコミュニティ財団)、清水郁郎 (芝浦工業大学)、高田静 (Hot Butter Design Office)、那須聖 (東京工業大学)、濱定史 (東京理科大学)、山田協太 (京都大学地域研究総合情報センター)	
設置 WG (WG 名：目的)		
2017 年度予算	135,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： http://news-sv.aij.or.jp/keikakusub/s25/index.html

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 拡大委員会「Tokyo-Barcelona: Dwelling Culture and Public Space」(於：建築会館、参加者数 29 名) 2. 公開研究会「in Action -The new social roles of architecture in Japan and Spain」(於：スペイン大使館、参加者数 67 名) 3. 拡大委員会「フィールドワークの未来形—岡山県奈義町のグランドデザインを契機として」(於：建築会館、参加者数 24 名)
大会研究集会	

<p>対外的意見表明・パブリックコメント等</p>	
<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>下記の通り、当初の活動計画における目標は概ね達成されている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 拡大委員会および公開研究会を通じてフィールドワークおよび居住文化研究について活発な議論を行い、知見をさらに深めた。 2. 拡大委員会「Tokyo-Barcelona: Dwelling Culture and Public Space」および公開研究会「in Action –The new social roles of architecture in Japan and Spain」(於：スペイン大使館)では、海外の建築家・研究者をゲストに迎え、英語での発表・ディスカッションを行った。留学生や会員外の参加者も多数得られ、国際的な視点から居住文化や建築デザインについて議論を深めることができた。 3. 書籍「建築フィールドワークの系譜」の刊行にむけて、当該のテーマについて活発な議論を行い、知見をさらに深めるとともに編集作業を進め、刊行の目処が立った。また、拡大委員会「フィールドワークの未来形—岡山県奈義町のグランドデザインを契機として」では他分野(土木・景観、色彩計画)の専門家をゲストとして迎え議論を行い、次期刊行物にむけた議論を行った。
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 書籍の刊行についてこれまで、企画の性質上、資料の収集に当初想定していた以上の時間と労力を要していたが、編集作業を進め、来年度の刊行の目処が立った。今後は刊行にあわせたシンポジウムなどを開催し、成果を広く公開することが課題である。 2. 公開研究会では昨年度まで、議論の密度は高いが、集客力という点ではやや物足りなかったが、今年度は海外からのゲストを招いた英語でのディスカッションやスペイン大使館との連携などの新しい試みを行ったところ、集客の面では大幅な改善がみられた。